

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	言語聴覚分野
学籍番号	15S3009	院生氏名	大内田博文
通学キャンパス	大川キャンパス		
論文題目	アルツハイマー病における語想起障害 -意味的クラスター形成からの検討-		
審査結果(枠で囲む)	合格		不合格
<審査結果の要旨>			
<p>1. 論文の概要：</p> <p>本論文は、アルツハイマー病（AD）における語想起課題の特性について、意味的関連性によるクラスター形成の観点から検討し、AD者が想起する語の意味記憶との関連性を明らかにすることを目的としたものである。対象は、ADと診断された85歳前後の高齢者34名（軽度AD15名、中等度AD19名）と、対照群としての同年代健常高齢者15名であった。なお、研究の実施に当たっては、本学の倫理審査委員会の承認を得ている。</p> <p>研究Ⅰでは、カテゴリ流暢性課題を実施し、意味的関連性によるクラスター形成について分析した。研究Ⅱでは、意味的クラスター形成のヒントとなる語句を与えた場合の語想起の変化について調べた。その結果、軽度ADも中等度ADも、語想起における意味的クラスターの形成は低下することがわかった。しかしながら、クラスターヒント効果については、中等度ADではその効果が認められないものの、軽度ADは想起語数の増加を認めた。これらの研究の結果、ADの語想起障害には意味記憶の低下が関与していること、また、障害パターンはADの病態進行に伴って変化することが示され、認知症病態の進行度によって語想起に特異性があることが示唆された。</p> <p>本研究の新規性は、ADの語想起課題を単なる量ではなく、意味的関連性によるクラスター形成の観点から検討していること、さらに、語想起の障害パターンが病態進行に伴って変化する可能性が高いことを明らかにした点にある。</p> <p>65歳以上の高齢者数が総人口の約27%（3,459万人）を占める本邦においては、ADを含む認知症者も約460万人いると言われており、医療、福祉・介護のみならず、地域社会においても認知症支援事業や予防対策が実施されている。認知症による言語障害やコミュニケーション障害は、失語症や高次脳機能障害とは異なるアプローチが必要であり、言語聴覚士が関わることによって、認知症患者のコミュニケーション機能が改善・維持できる。本研究は、認知症者の病態進行に伴うコミュニケーション支援の在り方を考える上で有用で、社会的に貢献する研究と考えられる。</p>			
<p>2. 審査結果</p> <p>審査会は2017年12月7日の1回開催した。論文の内容について審査員から指摘はなく、口頭試問においても適切に応答した。文献掲載の形式的な部分に関する修正を求めたところ、適切に修正された。</p> <p>以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が大内田博文氏に博士（言語聴覚学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	<p>主 査 城間 将江</p> <p>副 査 相澤 和美</p> <p>副 査 原田 浩美</p>		

